

二〇二六年四月二日

山寺の歌碑に散り積む落花かな  
名水の六腑に沁みる花の冷  
壇尻の太鼓に揃ふ法被衆  
消壺の大き炭つぐ春炉かな  
大川を航くとりどりの花見舟  
花束のあはひに白し霞草

勉 聖  
よし女  
千 鶴  
む べ  
せいじ  
勉 聖

二〇二六年四月二〇日

花の雲より抜けてきて電車着く  
昨夜雨を宿して門の紅椿  
ユーマンの歌の流るる花見船  
甲冑に春の塵置く武家屋敷  
海士畑の高き波音菜種梅雨  
燻されて涙目となる炉端かな  
立話尽きることなき日永かな  
新樹影目鼻欠けたる六地藏  
苔の上を浄土と落ちし椿かな

やよい  
きよえ  
うつき  
む べ  
よし女  
む べ  
澄 子  
うつき  
明日香

二〇二六年四月九日

道の駅菜の花畑を籬とす  
花吹雪行き交ふ人を洗礼す  
帰るなり大の字に寝る花疲れ  
蒲公英の絮吹き飛ばす肺活量  
花見船あひ手を振りあひてすれ違ふ

よし女  
む べ  
せいじ  
明日香  
うつき

二〇二六年四月八日

垂れ幕に創立百年花の門  
マイカーに玉砕せんと花吹雪  
裸婦像の豊胸の辺に蝶あそぶ

む べ  
ほたる  
もとこ

二〇二六年四月七日

走り根の掴む大地や大桜  
菜種梅雨錆を深めし船錨  
花絵巻紐解くやうや能勢の道

明日香  
よし女  
うつき

二〇二六年四月六日

うららかや垣根隔てて立ち話  
花人を傘下に包む大樹かな  
風光る古墳の苑に蜂巣箱  
落花舞ふ小さくなりし母の背に  
百合の香の堂に満ちたるイースター

伸 枝  
たか子  
うつき  
康 子  
せつ子

二〇二六年四月五日

一穢なく復活祭の空真青  
激つ瀬の岩を褥に落椿  
ふり向けば来し方遙か花の雲  
たんぼぼの原より生れし紋黄蝶  
落花舞ふ笛の調べに和すごとく  
春宵や足が勝手に縄のれん

和 繁  
康 子  
澄 子  
うつき  
風 民  
澄 子

毎日句会みのある選・二〇二六年四月二三日